

を先導し、浅科村創設に尽力した。条例を定め、山林の収益を五郎兵衛用水の管理費に充てることを条件に合併を実現させた中澤が、同年浅科村村長を辞し、長野県議会議員に初当選した頃、ようやく鹿曲川県営灌排水事業が実施にうつされた。

建設から三百数十年が経ち、漏水などがひどかった用水路を全面近代化することにより、水系の各所で夜を徹し行われた「水番」や、他人の水を横取りしたことによる「水喧嘩」は昔語りになった。



改修を終えた五郎兵衛用水の築堰（中原地籍）

さらに、改修により生じた剰余水を御牧原台地へ分与することができるようになり、溜め池しかなかった広大な御牧原台地に流水が巡り、水不足から解消され

た人々は喜び「ああ ありがたきかな此の水」との碑を建てて祝った。



御牧原台地へ水を運ぶ鹿曲川水管橋と望月サイフォン
『県営御牧ヶ原農業水利改良事業竣工記念集』所収

ここに至るには頭首口からの取水につき下流の本牧村（現佐久市望月）や北御牧村（現東御市）の同意が不可欠であり、話し合いは長期に及び、夜ともなればバスは無い。自転車で役場や村長宅を訪れ話し合いを重ねた。こうした努力や挫けない態度が人々の理解と共感を生んだのだろう。誰言つとなく「五郎兵衛用水中興の祖」と評されるようになっていった。いち早い土地改良事業の先見性と熱意が郷里の人々に評価されたのである。

幼い頃は勿論、学生時代、若くして就いた収入役時代、村長、県議会議員時代を通じて指導を受けた沢山の

個性的な師、心から許し頼み合った友との豊かな交友は、彼の生涯を彩る特筆すべき幸運であり、これが多方面で精力的な活動を支えた力になったといえよう。

●平和で豊かな農村の発展のために

中澤は農業・農村の振興分野以外にも多様な足跡を残している。地域の住民運動へと発展した浅間山米軍演習地化反対や水源地の国有林払い下げ撤回のほか、軽井沢三笠ホテル取壊しに抗して「スチール・ジャズ」一条重美らと奔走回させ、重要文化財指定に導いた。

また五郎兵衛記念館を設立して、村々に残る資料の散逸を防ぎ、さらに調査・研究のため、信州農村開発史研究所を設立した。

そのほか、浅間病院開設に尽力し国民健康保険直営病院として実現し、佐久総合病院の若月院長と奔走し全国農村保健研修センターを完成させるなど、彼の生涯はまさに狄嶺の説く「農民と共に」であった。

蓼科山の頂に残雪流れし五郎兵衛田圃青田なり

（虎雁）

（佐藤治郎）

参考文献

中澤周二追悼文集刊行委員会『竹溪のながれ』

佐久の先人たち③

五郎兵衛用水中興の祖

なかざわしゅうぞう

中澤周三

(1907~1991年)



県営土地改良事業への早期取り組みに併せ市川五郎兵衛翁の遺徳を継ぎ、五郎兵衛用水の大改修と鹿曲川から御牧ヶ原台地への用水の開発に情熱を燃やし、地域発展に貢献した政治家。

●多彩な師と友に恵まれた生涯

中澤周三は一九〇七（明治40）年、北佐久郡五郎兵衛新田村（現佐久市浅科）の染色業と農業を営む家に生まれた。終生の友として用水改善事業を共に遂行した伊藤一明とは、御牧尋常高等小学校に入学する頃に出会った。

一九二二（大正10）年、野沢中学校（現野沢北高校）に入学した中澤は、校風について校長と意見が対立するが互いに譲らず、三年生の春に学友数名と中退し上京する。中学の担任和合恒男はこれに抗議して自らも

退職。以降和合は多大な援助と指導を中澤に授けた。

一九二五（大正14）年、東京の中央郵便局で勤務を始めた中澤は、翌年肺炎カタルを煩ったため帰郷した。

一九二八（昭和3）年、金融恐慌の煽りを受け農村が疲弊する中、中澤は五郎兵衛新田村の土屋村長に見出され、21歳の若さで収入役となった。

その頃、禅の修行を積んでいた中澤は、一九三二（昭和6）年、道号「竹溪」を授かった。また自由律俳句の荻原井泉水の門下に入り、俳号を普周として句作にはげみ、「から松の峰ではれた原つばです」が井泉水の主宰する句誌「層雲」で一位となった。



収入役時代、積大眉老師（中央）と神津猛（左）とともに『竹溪のながれ』所収

一九三二（昭和7）年、従兄の中澤始らとともに五郎兵衛翁の遺徳を偲び円心会を結成、近郷の青壮年と農村改善について学び語りあふ。翌年、収入役を辞任し、和合が主宰する瑞穂精舎で学ぶ。さらに一九三四

（昭和9）年に江渡狄嶺が主宰する東京の牛欄寮にて農を尊ぶ精神を学ぶも、体調を崩したため、再び五郎兵衛新田村に戻った。

江渡の推薦により、帰郷した翌年から長野県庁の嘱託職員として農村更生のために働き始めるが、一九三七（昭和12）年に従兄の始が死去したことから、自家の後継者となるため帰郷。結婚して家業の染色業に従事し、染色工業組合の設立などに携わった。

一九四五（昭和20）年、召集され中国大陸に渡るも赤痢に冒され、生死の境をさまよい同年暮れに帰国。しかし「敗残兵が松の内に帰る訳にはいかぬ」と翌年一月十五日過ぎを待つて帰宅した。

●郷里の人々と共に

第二次世界大戦後の荒廃から立ち直るため、農業農村の発展を願い、一九五二（昭和27）年に五郎兵衛新田村の村長となった中澤は、村会議員らと鹿曲川水系の総合開発を企画し、関係町村との協議に入った。

しかし水利問題には各町村の利害や長いしきたりが深く絡まっており、頓挫することもしばしばであった。一九五四（昭和29）年、北御牧村（現東御市）の保科岩雄村長及び小諸市の小山邦太郎市長から御牧原台地への揚水要請があり、これを受けて事業実施の機運は高まった。

翌年には中津村、五郎兵衛新田村、南御牧村の合併